

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 数量が大であることを表す不特定数量詞の意味分析

氏 名 金 奈 淑

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、現代日本語において数量が大であることを表す数量表現 10 語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明確に記述することである。本研究が考察対象とする語は以下の 10 語である。

**考察対象とする語：「たくさん」「いっぱい」「たっぷり」「どっさり」「大勢」「多数」「多量」「大量」「数多く」「多く」の 10 語**

この目的に向けて第 2 章では、本研究で考察する数量表現の位置付けを行った。先行研究において、本研究の考察対象とする語は、個別の意味と相互の意味の類似点・相違点が十分に記述されていない。これは、これらの語が副詞、名詞、形容（動）詞、など複数の品詞にまたがっていることが理由の一つであると思われた。他方、特定の数量を表す助数詞の先行研究において、数量詞（数詞＋助数詞）のみならず助数詞以外の数量表現も助数詞の機能である個別化と範疇化の機能を持つことが指摘されていた。そこで本研究は、考察対象とする語を不特定数量詞として以下のように位置付けた。

**考察対象とする語の位置付け：**

1. 「に」や「と」を伴って、あるいは、単独で動詞を修飾する位置に生じ、文中に現れる名詞の数量が大であることを表す不特定数量詞である。
2. 名詞を範疇化し個別化する機能を持つ。
3. 「の」を介しての連体修飾用法において名詞の数量や属性を表したり、連用修飾用法において動きの量を表すことができるものも含まれる。

助数詞の分析において、経験基盤主義をとる認知言語学のアプローチが有効であることから、本研究では認知言語学のアプローチを用いて分析を進めることとし、第 3 章においては、認知言語学の基本的な概念について概観した。

第 4 章では、助数詞の範疇化と個別化を手がかりに、考察対象とする 10 語の下位分類を行った。10 語は、基本的に独自の個別化と範疇化の機能を持ち、プロトタイプ効果を見せながら体系的なバリエーションを示すことを記述した。

第 5 章から第 9 章までは下位分類によって、10 語の個々の意味分析と類義語分析を行った。

まず、第 5 章においては、モノ名詞の数量を表す「たくさん、多数、大量、多量」の 4 語の意味を以下のように記述した。

「たくさん」：

別義①<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

別義②<ある動きの量が><大であると捉えるさま>

別義③<話し手が体験したある量が><それだけで十分であると捉えるさま>

別義④<ある事柄に対して><それ以上受け入れられない状態にあると捉えるさま>

「多数」：

別義①<個別化の度合いが高いものや出来事の数量が><大であると捉えるさま>

別義②<全体における><個別化の度合いが高い構成要素の割合が><他方より><大であると捉えるさま>

「大量」：<具体物の数量が><(個別性が際立たないほど)著しく><大であると捉えるさま>

「多量」：<均質なまとまりである><有情物を除く具体物の数量が><大であると捉えるさま>

類似点・相違点は以下の通り記述した。

「たくさん」は、特定の形状や特徴を指定せず、さらに具体物・抽象物を問わず、ものの数量が大であることを表す無標の表現である。「大量」と「多量」の対象は、助数詞や計量単位で表すことが想定できる、すなわち、空間に存在すると想定できる具体物に限られる。さらに、空間に存在する具体物ではないがより具体性の高いものや出来事の場合、「多数」が用いられる。さらに、「大量>たくさん>多数・多量」の順に数量の程度差が認められる。このことから、「たくさん、多数、大量、多量」の使用には、文体の他に、個別化の度合い、具体性(抽象性)、数量の程度、の4点が大きく関わると言える。また、「大量」と「多量」は、ともに個別性の低い具体物(連続体)と高頻度で共起する。しかし、「大量」は有情物など個別化の度合いの高い具体物とも共起するのに対して、「多量」は有情物を表すには「大量」より制限が厳しい。このことから、「多量」は「大量」よりもさらに内部構造が均質なまとまりとして捉える表現であると考えられる。ただし、「大量の人」は「たくさんの人」「多数の人」よりも使用に制限が認められる。つまり、この4語の表す対象には「多量>大量>多数・たくさん」の順で、特徴的な形と境界、内部構造が失われる度合いが高いという質的な差異が認められる。

次に、第6章では「多く、たくさん、多数、数多く」をとりあげ、出来事と動きの量を表す用法における相違点・類似点について考察した。また、「数多く」と「多く」の個別の意味を分析した。

まず、「多く」と「数多く」の個別の意味を以下のように記述した。

「数多く」：<個別化の度合いが高いもの・出来事・動きの><構成要素に注目して><数量が><大であると捉えるさま>

「多く」：

別義①<あるものや動きの数量が><ある基準を><上回ると捉えるさま>

別義②<全体における><ある構成要素の割合が><高いと捉えるさま>

別義③<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

別義④<ある出来事の生起する回数・頻度が><大であると捉えるさま>

類似点と相違点を以下の通り記述した。

まず、「数多く」と「多数」はともに、典型的には個別化の度合いの高いものの数を数えるが「数多く」はものに加えて、動きや出来事といった「動詞」に近い概念を数えることができる。これに対して、「多数」は「動き」は数えることが難しく、「出来事」の中でもよりものに近い出来事を数えるが「動詞」に近い出来事を数えることはできない。このことから、「数多く」は時間の流れ

に沿って数える表現であり、「多数」は時間の流れを捨象して一まとまりとしての全体に注目する表現であると考えられる。逆に、一まとまりの全体に注目し、個々の構成要素が際立たない場合、「数多く」を用いることは難しい。また、「数多く」は個別化の度合いの低い感情的な抽象物も数えることができる。以上のことから、「数多く」の個別化には連続走査が大きく関わっているのに対して、「多数」の個別化には累積走査が大きく関わっていると考えられる。以上を踏まえ、上の「多数」の別義①を<個別化の度合いが高いものや出来事の数量が><一まとまりとして><大であると捉えるさま>と訂正して記述した。

また、「数多く」と「たくさん、多く」については、連用修飾用法において出来事や動きの量を表す場合、「数多く」はあくまでも動きの構成要素に注目し、一つ一つ数えるのに対して、「たくさん、多く」は動きや出来事の量を結果的に一まとまりに表すことが明らかになった。

続いて、第7章では「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」の5語を考察対象とし、特に人間を表す場合の類似点・相違点を分析することによってこれら5語の使用を決定付ける要因を考察した。分析の結果、まず「大勢」の意味を以下のように記述した。

「大勢」：<一まとまりとしての人の数量が><大であると捉えるさま>

そして、これら5語の使い分けは、文体差のみならず、同じ対象（人間）に対して、個体として捉えるか連続体として捉えるか、さらに、空間に存在する具体的な存在として捉えるか出来事のような抽象的概念として捉えるか、という存在論的カテゴリーの違いを反映していることを記述した。また、個々に注目するか、一まとまりとして捉えるかという構成要素の際立ちに差があることを指摘した。

第8章では、「どっさり、たっぷり、いっぱい」を取り上げ、3語の個別の意味と「どっさり、たっぷり」と「たっぷり、いっぱい」の相互の意味の類似点・相違点について考察した。「たっぷり」と「どっさり」は「体感に関わる経験」に大きく関わり、「たっぷり」と「いっぱい」は「空間認知に関わる経験」に大きく関わる表現であることから、身体的な経験がこれら3語の意味の基盤になっていることを記述した。そして個別の意味を以下のように記述した。

「どっさり」：

別義①<一かたまりと捉えられるものの数量が><（重いと感じられるほど）大であると捉えるさま>

別義②（数量詞と共起して）<（重いと感じられるほど）大であると強調するさま>

「たっぷり」：

別義①<（容器として捉えられる空間において）ものの量が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

別義②<一連の動きの量が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

別義③<話し手の経験した空間の許容範囲の程度が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

別義④（数量詞と共起して）<期待・予想を上回り大であると捉え強調するさま>

「いっぱい」：

別義①<容器として捉えられる空間において><中身の量が許容範囲の限界まで達するさま>

別義①-1 <容器として捉えられる空間が><（中身で）許容範囲の限界まで達するさま>

別義②<容器として捉えられる空間の><限界点を表すさま>

別義③<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

別義④<ある動きの量が><大であると捉えるさま>

「どっさり」と「たっぷり」の相互の意味の類似点・相違点は以下のように記述した。

まず、「どっさり」と「たっぷり」は、ともにオノマトペから派生し、異なる経験の領域において、私たち自身の内部にもたらされる感覚を表す表現であることが共通している。さらに、行為を行なうものなら誰でも同じ体感や感覚を経験できると捉えられ、読み手に当事者感を与える表現である点も共通している。

相違点として、「たっぷり」は、容器のイメージスキーマを直接の基盤とする表現であり、連続体を典型とした、容器における中身と捉えられるものを対象とする。さらに、「たっぷり」は、話し手の期待・予想が想定されその基準を上回ることを表すことから、基本的にプラスの評価性を持つ。一方、「どっさり」の対象は、典型的に個体（の集合）であり、「動かす、支える」といった行為や活動における重さやそれに伴う負担感が活性化される。その際、プラス評価・マイナス評価のどちらとも違和感なく結び付き、評価性としてはほぼ中立と考えられる。両語は、プラス・マイナスのいずれに用いられても、読み手にもたらされる体感の領域が異なる。「たっぷり」は飲食物を摂取したあとの満腹感や期待・予想を上回る量を経験した際の満足感のような身体が満ち足りた体感であり、「どっさり」は重い物を支える、あるいは動かす際の体感である。さらに、両語の意味拡張には文法化のプロセスが認められ、数量を表す意味が希薄化し、話し手の評価、心的態度を表す機能的な用法が認められる。その場合にも、両語の表す体感は維持される。この体感の違いは、両語のオノマトペとしての本来の意味、すなわち音象徴に基づくと考えられる。

続いて、「いっぱい」と「たっぷり」はともに容器のイメージスキーマを基盤としているが、イメージスキーマを構成する異なる要素を焦点化する。すなわち、「いっぱい」は「容器」「中身」「限界点」を焦点化できるが、「たっぷり」は「中身」のみに注目する。この焦点化の違いが、複合形式（「A ippai no / tapparui no B」）における両語の意味の違いをもたらしている。つまり、イメージスキーマがこの形式（構文）の意味を動機付けていると考えられる。

第9章では、「多く」と「たくさん」を取り上げ、相互の意味の類似点と相違点について考察した。

分析の結果、両語には個別化の違いが認められた。すなわち、数量の捉え方において、基本的に「多く」は、母集合やスケール上での相対的な判断を示すことから、比較の基準が明示されるか、あるいは想定できなければならないという制約がある。しかし、対象の属性を述べると捉えられる場合にはこの制約が無効になり、話し手が基準の明示なしにその量が大きであると判断できる。そしてその場合、「たくさん」とほぼ同じ意味で置き換えることができる。一方、「たくさん」は母集合を前提とせず、単独で一般的な基準によって量を判断する表現である。さらに、連体修飾用法「たくさんN」はあくまでもNの数量を表すのに対して、「多くのN」は種類を表し、総称名詞句として範疇化機能を有する用法を持つ。そして、この違いは母集合を前提とするか否かという「多く」と「たくさん」の本来の意味に動機付けられていると考えられる。

最後に、第10章ではまとめと今後の課題について述べた。

「言葉には、環境に働きかけ、環境と共振しながら世界を解釈していく主体の感性的な要因や身体性にかかわる要因（五感、運動感覚、視点の投影、イメージの形成 等）がさまざまな形で反映されている」とされる。本研究は、数量が大きであることを表す不特定数量詞においても私たちが世界を解釈していく感性的な要因や身体性に関わる要因がさまざまな形で反映されていることを示した。